



【国際交流】国際姉妹都市のシトカ市派遣報告

先日、1年生廣田花監さんと丸瀬みずきさんがシトカ市派遣についての報告をプレゼンテーションしてくれました。

交流内容として、根室市とシトカ市の産業や歴史などをそれぞれが紹介。食事を作ったり、授業ではバレーボール、プログラミング、eスポーツなどで交流を図りました。また、アラスカデーという街の祭にも参加するなど、日本と海外の食文化や慣習など違い肌で感じ取ることができたとのこと。

この派遣事業で身に付いた、または、身に付ける必要があることは、①「**吸収力**」で、与えられた環境において、その場面に応じた臨機応変の対応を考えて行動すること。②「**向上心**」で、英語力を付けることだけでなく、何事にも興味・関心を持ち学んでいくこと。③「**判断力**」で、その時々で何をすべきか、また、相手が何を求めているかを即座に考えたり、判断する力を持つこと。④「**楽しむこと**」で、英語が通じなく上手くコミュニケーションが取れないことや文化が異なりストレスが溜まり、落ち込むこともあったが、そのような時こそ、笑顔で苦しみを楽しみに変えること。⑤「**英語力**」で、ネイティブの英語は聞き取りにくく、英語の力（単語や語彙の習得含む）を磨く必要があること。今後、根室市とシトカ市が相互に交流できるように、さらに、市内の中学生にもこの派遣の成果報告ができればよいと考えている。また、中学生には、中学時代に英語に関心を持って、高校で派遣された場合はその成果が発揮できる場があるなど、次の代につなげたいとの意欲を持っていました。

このような経験を踏まえて、丸瀬さんは、この研修で自己課題を知り、今後、英語力を高めたり、積極的に行動することを心がけていきたい。外国人は軸あり自分を持っており、自分も周囲に同調するのではなく、自分の考えやスタンスを持ちたい。将来は、家業は漁業をしているため、英語を生かして海外の漁法などを取り入れるなど漁業の普及を図りたいと考えている。廣田さんは、この研修では積極的に行動するよう心がけ、日本の良さを改めて知る機会となった。外国人のコミュニケーション能力は高く、また、衛生環境においては日本が格段に良いことが分かった。将来は、英語に携わる職業に就きたいと考えているが、英語ができるだけでなく、人間的にも成長していくために、いろいろなことにチャレンジしたいとのこと。

引率した本校の濱野教諭に話を聞きました。2人の生徒は、初めは度感いながらも、自分たちが今できることとできないことを理解し、分からないことをそのままにせず質問したり、調べたり、話し合いする場面が随所に見られました。この研修は2人にとって、よい学びとなり、次の学びに繋がっていくものと期待しています。なお、濱野先生は今回の研修をもとに、授業の中で研修の様子を写真に収め、授業で積極的に取り入れ、異文化を理解促進の取組など成果を還元してくれています。



【シトカ市派遣とは】 アマリカ合衆国アラスカ州シトカ市とは、昭和50年12月姉妹都市締結以降、様々交流を図り、親好を深めています。近年、コロナ禍などの影響により交流が停滞していました。今回、交流が再開されることとなり、親善交流を通じて、今後の交流の在り方を調査、高校生が異文化に触れることで、外国語に対する興味・関心を高め、これからの国際交流の担い手となる広い視野を持った人材育成を目的に行われています。今回、10月14日～21日の日程で、根室高校1年生2名と引率者3名がシトカ市に派遣されています。

【1年次】1年次学年主任 永井先生へのインタビュー

1年次主任 永井大元先生に1学年について話を伺いました。

1年生が入学してからもう3/4（8ヶ月）が経過しました。私のこの学年への想いや願いは、

1年生 全員が「幸せ」になること。

1年生の生徒全員が現在の学校生活、1年後、2年後の学校生活、卒業後の就職や進学先、今後の人生において、幸せになることです。そのため、学校では、しっかりと勉強に向かうことを期待しています。授業が大切です。

生徒の皆さんは、将来、何らかの職業に就きます。そのため、高校生のうちに学ぶ姿勢をしっかりと持ち、学んで、知識を蓄えたり、考えることは、お金を得ることにも繋がり、生涯賃金にも影響を及ぼします。いろいろな可能性がある若い時代の「今」が大切です。

入学当初は一部落ち着かない状況も見られましたが、少しずつ勉強に向かう姿勢も身に付きつつあります。最近の学年集会では、多くの学年の先生からいろいろな観点から話をしてもらい、生徒の皆に、学習、生活、進路、人との付き合い方など多く事を考えてもらうようしています。

この学年のよい所は、明るく人懐っこいところですが、逆に、このことは、度が過ぎることによって人に嫌な思いをさせてしまうこともあるのだと気付かなければいけません。適切なコミュニケーションや人との関わり方などの大切さも学んでほしいと思います。

まだ、高校生は青年期であり、自分事、将来のことなど多くの悩みや不安もあるときです。そのため、学年団、教科担任、部活動顧問の先生方が、これまで以上に、HR、授業、学校行事、部活動など多くの場面で関わりを持ち、信頼関係を築けるようになると生徒達は多くの事を学べるようになるのだと思います。その生徒と教師との関わりの中で、生徒達が多くの刺激を受け、自己理解や他者理解、将来の自分をイメージしてもらいたいと思います。

今後の1学年の取り組みや活動の展望として、①各種資格・検定の受検、②得た知識や考えた内容をわかりやすく説明するプレゼンテーション、③多様な意見をもとに、自己の考えをまとめディベートなど、主体的な活動の場面を設定していきたいです。

（インタビュー終えて・・・）永井先生から生徒へのメッセージとして、「命を大切にすること」をあげてくれました。永井先生は中学校時代に父親を亡くされており、命の大切さを身をもって知ったとのこと。「幸せ」という言葉は、この経験からくることばなのかもしれません。

